インタビュー資料に見る日本語学習者の指示詞「コソア」の習得について

山本裕子

キーワード　*指示詞コソア、正用、誤用、情報量の差、聞き手への配慮*

1.はじめに

指示詞コソアの使用[注1]は、談話の参加者が協調して談話を展開していく上で重要な働きを持つ。また指示詞にはさまざまな用法があり、初級から学習項目とされているが、中上級レベルになっても誤用が減らないことが指摘されている。本稿では日本語学習者のインタビューの資料に見られる指示詞の使用を分析し、日本語学習者の指示詞コソアの習得過程について考察する。

2.先行研究とその問題点

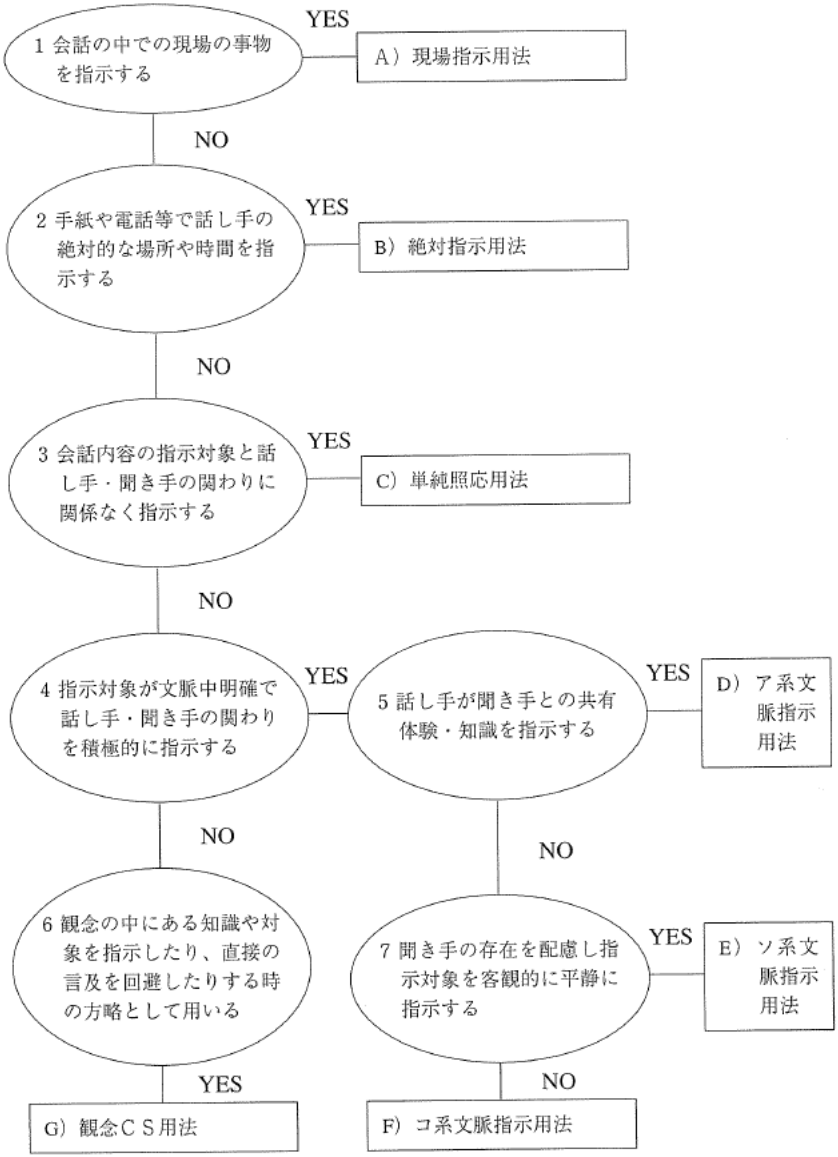
第二言語としての日本語の指示詞の習得過程についての先行研究は多くない。学習者の誤用から日本語の指示詞体系を考察したものや、中国語や韓国語の指示詞と対照し、特定の母語話者の指示詞習得上の困難点を考察するものではなく、学習者の指示詞の使用を中間言語と位置づけ、母語の相違を越えた特徴を考察したものには迫田（1998）と上垣（1997）がある。しかし上垣（1997）は話しことばを分析したものではない。そこで、ここでは迫田（1998）について、その概要を述べ、問題点を指摘する。

迫田（1998）は日本語話者と日本語学習者の指示詞の習得過程を比較することによって日本語学習者の中間言語形成過程の特徴を明らかにしようとするものである。まず迫田（1998）の指示詞の用法の分類、および分析の枠組みを（1）に示す。迫田（1998）は日本語話者の指示詞使用実態の分析に基づいて

注1 指示詞にはコ・ソ・アの3系列に各々「これ、この、ここ、こういう」等の形態がある。本稿ではこれらの形態をまとめて各々コ系、ソ系、ア系とし、3系列を合わせてコソアと表す。

コソアの用法を分類し、さらに各用法を選択する条件をフローチャート化して分析の枠組みを設定している。

(1) 話しことばにおける指示詞コソア用法の枠組み（迫田1998：101）



(1) にはいくつか問題点がある。まず文脈指示用法ではコソア3系列が用いられるとされているが、それ以外の用法で用いられる系列は明確に示されてはいない。例えば絶対指示用法、単純指示用法としてコ系とソ系の例のみが示されているが、これら2つの用法にはア系は用いられないものであるかは不明である。また、単純照応用法と文脈指示用法を別の用法とする根拠がわかりにくい。(1) によると、単純照応用法は「会話内容の指示対象と話し手・聞き手の関わりに関係なく、指示する」ものであり、文脈指示用法は「指示対象が文脈中明確で話し手・聞き手の関わりを積極的に指示する」ものとされている。つまり、いずれも指示対象は言語テクストの中に存在するものであるので、「話し手・聞き手との関わり」が指示対象に含まれるか否かが相違点になる。迫田 (1998) の文脈指示用法の例を検討しよう。

(2) A：〇〇先生はお元気？一緒に一年生を教えてるんでしょう？
　　B：ええ、あの先生は、元気すぎるくらい元気ですよ。(迫田1998：99)

(2) はア系文脈指示用法の例である。談話参加者A、B両者が、指示対象である「〇〇先生」を知っているためにア系が用いられている。このように、確かに文脈指示用法では、指示対象に関する、話し手及び聞き手の情報量の関係によってコソアが使い分けられている。また、単純照応用法の例としては次の例が挙げられている。

(3) これ全く関係ないんだけどねー、息子ったらこづかいもらうと全部つかっちゃうのよねー。(迫田1998：100)

(4) (最近両親は) 理解してくれる人がおったら、その時は結婚しなさいとかゆうようになってー。(同)

(3) の指示対象は「息子がこづかいをもらうと全部使ってしまう」ということであり、(4) では「理解してくれる人が現れたとき」である。いずれも指示対象は文脈中に明確に存在している。(1) に従えば、(3) (4) では話し手、聞き手の関わりに関係なく指示詞が選択されていることになるが、その具体的に意味するところはわかりにくい。また、迫田 (1998) は (1) とは別に、指示詞系列の選択に関して次に示す制約が存在することを指摘している。それが単純照応用法の選択基準であると思われる。

(5) a 指示対象が未来の仮定的な事柄の場合は、コ系やア系の指示詞は使用できない。
　　b 直接的な知識や体験が話し手に明確な指示対象として捉えられ、かつ現場指示の目の前に存在する事物のように提示される場合は、コ系指示詞が使用される。(迫田1998：63[注2])

(5) には確かに指示対象と話し手、聞き手の関わりは示されていない。しかし、

指示対象に関する情報量という点では、(5a) は未来の仮定的な事柄が指示対象であるので話し手に指示対象に関して確立した情報がないが、(5b) では指示対象は直接的な知識、経験であるので、話し手には指示対象に関して確立した情報があるということになる。このようにみると (3) (4) のように単純照応用法とされているものも、話し手（又は聞き手）の指示対象に関する情報量から捉えることが可能だと思われる。よって単純照応用法を文脈指示用法と特に区別する必要はないと考えられる。

また迫田（1998）は一つの用法にまとめているが、観念ＣＳ用法と一括りにされている「観念の中にある知識や対象を指示する」ことと「直接の言及を回避する」ために指示詞を用いることは異質である。両者とも指示対象が言語テクストにあるのではなく、話し手の観念の中にある点では共通しているが、前者にはコミュニケーションを円滑にする機能はない。一方、後者には指示詞の使用によってコミュニケーションを円滑に進めようという機能が含まれており、ストラテジーとしての性質を持っている。よって前者と後者は区別すべきものであると考えられる。以上、枠組みの問題点を指摘した。

次に迫田（1998）での結論をまとめて提示する。

1. 日本語話者と日本語学習者の指示詞の習得過程は異なる。日本語話者と異なり、日本語学習者は初期にコ系を多用し、ア系の習得が困難である。
2. 日本語学習者の誤用には以下の種類がある。

コ系文脈エラー	直前に発話された内容ではないものを指示内容とする本来はソ系・ア系を使用するべきもの
ソ系文脈エラー	後の叙述内容を指示内容とし、本来はコ系単純照応用法であるもの
ア系文脈エラー	話し手のみが知っているものに対し、ソ系ではなくア系を使用するもの
観念ＣＳエラー	コ・ア系の観念ＣＳ用法においてソ系を使用する。

3. 日本語学習者の習得過程は以下のようなものである。

正用の出現順序

コ系文脈指示≧ソ系文脈指示＞ア系文脈指示＞観念ＣＳ用法

誤用の出現順序

コ系文脈エラー＞ア系文脈エラー＞ソ系文脈エラー・観念ＣＳエラー

誤用の消滅順序

[注2] 迫田（1998）はこの他3点の制約を指摘しているが、ここではそのうち単純照応用法に関わると考えられる2点を挙げた。

a 韓国語話者の場合

コ系文脈エラー＞ソ系文脈エラー・観念ＣＳエラー＞ア系文脈エラー

b 中国語話者の場合

ソ系文脈エラー・観念ＣＳエラー＞ア系文脈エラー・コ系文脈エラー

4. 中間言語への言語転移が見られる。中国語話者は3年経過してもコ系文脈エラーが消滅せず、習得が困難である。韓国語話者、英語話者にはそのような傾向は見られない。
5. ア系文脈指示エラーは母語を問わず消滅しないことから、文脈指示用法でのソ系とア系の使い分けが習得困難であることが分かる。要因として日本語学習者は、ソ系と抽象名詞、ア系と具体名詞を結び付けるというパターンを誤って形成していることを指摘し、検証した。

迫田（1998）は日本語学習者の指示詞コソアの習得過程には、日本語話者とも異なり、また母語の相違を越えた学習者に共通の特徴が見られることを明らかにした。さらに誤用の原因を考察、検証した点でも意義深い。

しかし、枠組みにおける問題点に加え、以下の問題点がある。豊富な横断、縦断調査に基づいているが誤用内容の分析が中心であり、正用の内容について十分分析されているとはいえない。また被調査者が中国語、韓国語話者に限られており、その他の母語話者についてもその結果が妥当であるかは検証すべき課題である。さらに被調査者は中上級レベルの学習者であるが、一般的には初級レベルで学習を中断する学習者の方が多く、その場合の習得過程は異なる可能性もある。本稿ではこれらの点を踏まえて、分析、考察を行う。

3.インタビュー資料における分析

3-1.目的

日本語学習者の指示詞の習得過程の特徴を明らかにする。具体的には以下の2点について分析、考察を行う。

1. 日本語学習者の指示詞使用に見られる正用、誤用の傾向、及びその原因について分析、考察する。正用、誤用の出現および消滅順序、誤用の原因について迫田（1998）の結論を支持する結果が得られるかどうかの検証。
2. 指示詞はすべての場面で一系列のみが選択されるのではなく、場面によっては複数の系列が使用可能である場合がある。このような場合に日本語学習者が示す指示詞選択の傾向。

これまでの研究では2については分析されていないが、本稿ではこの点につい

ても分析を試みる。

3-2.方法

名古屋大学における日本語研修コース修了生のうち、名古屋大学大学院に進学した初中級レベルの留学生に対して行われた「日本語研修コース修了生追跡調査」[注3]の発話調査データを用いる。発話調査はコース終了後、ほぼ3ヶ月に1回計11回にわたって実施され、被調査者には毎回インタビュー（30分）等の課題が行われた。本研究では10名分のインタビュー資料を分析した。被調査者の母語、性別、専門等については表1に示す。また被調査者の日本語研修コース修了時点でのレベルは初中級レベルである。

氏名	性別	修了時の年齢	国籍	母語	専門
1 MIK	男	35	ハンガリー	ハンガリー語	森林生態学
2 BIR	男	31	ネパール	ネパール語	大気水圏科学
3 CHA	女	28	スリランカ	シンハラ語	情報システム工学
4 YUR	男	31	ロシア	ロシア語	機械工学
5 ABI	男	30	フィリピン	タガログ語	動物生殖制御学
6 MUK	男	33	ザイール	スワヒリ語	国際開発
7 ARI	男	28	イラン	ファルシ語	養蚕学
8 ANA	女	23	ブラジル	ポルトガル語	国際開発
9 KUR	男	33	ルーマニア	ルーマニア語	地球惑星進化学
10 IBA	男	29	チリ	スペイン語	情報工学

表1　被調査者一覧

表1に示した被調査者のうち、MIK、BIR、CHAについては2年間にわたる資料、すなわち第1回目、それから1年後の第4回目、さらに1年後の第7回目の資料を分析し、残りの7名については1年間の資料、すなわち第1回目と第4回目の資料を分析した。

注3 「日本語研修コース修了生追跡調査」の詳細については『日本語研修コース修了生追跡調査報告書1994』『日本語研修コース修了生追跡調査報告書2　1996』『日本語研修コース修了生追跡調査報告書3　1998』を参照。

3-3.分析の枠組み

迫田（1998）の枠組みの問題点を踏まえて、本稿での枠組みを設定する。

（6）分析の枠組み

A現場指示用法　会話の中で眼前の事物や身振りを指示し、話し手、聞き手の関わりにより、指示詞が選択される

aコ系　bソ系　cア系

B絶対指示用法　指示対象が常に定まっていて、絶対的にそれを指す[注4]

aコ系　bソ系　cア系

「最近、こっち（話し手の居住地）に戻ってきた人で・・」

「そっち（聞き手のいる場所）の天気はどう？」

「あの世でまた会いましょう。」

C文脈指示用法　指示対象が言語テクストの中で明確であり、話し手、聞き手の関わりにより指示詞が選択される

a　コ系　聞き手の情報量に関係なく、話し手には情報量が多く、話し手が指示対象を身近に捉えている場合

b　ソ系　話し手が聞き手に説明を求める、説明をする等、聞き手に配慮が必要な場面で、対象に関して中立的に指示する場合

c　ア系　話し手、聞き手に共有体験、知識のある指示対象の場合

D観念指示用法　言語テクストには指示物がなく、観念の中にある知識や対象を指示する。

a　コ系　「『これは何ですか』と日本人に聞きます」

b　ソ系　「ちょっとそこまででかけます」不確か。曖昧なもの

c　ア系、「ねえ、あれ、とって」「うん、あれね」聞き手と共有知識・体験のあるもの

ＥＣＳ用法　直接の言及を回避したりするときのコミュニケーション・ストラデジー（ＣＳ）として用いられる。

a　コ系　「私は何かこう、結構気が弱くて…」

b　ソ系　「まあそんなわけで、失礼します。」

c　ア系、「日本の生活はあれですか、大変ですか。」

3-4.分析の手順

以下の手順に従って、分析を行った。

1. インタビュー資料の中に見られる日本語学習者の指示詞が使用されている

注4 堀口（1990：63-65）を参照。

発話を分析の対象とする。ただし、以下のものは分析の対象外とする。

①言いよどみ　あの…　その…
②相づち　ああ、そうですか。そうですね。
③応答　はい、そうです。
④ソ系を含む接続詞　それで、それから
⑤連続した指示詞　「それ、それは、…。」一つだけカウントする。
⑥すぐ中断するなど、照応するものがない
⑦副詞的用法　「そんなに…ない」

2. 使用されている指示詞が正用であるか、誤用であるかを判定する。ここでは系列が正しければ、形態が間違っていても正用とした。なお、判定は筆者の他、1名の日本語母語話者にも依頼し、3名分の資料について正誤の判定を行った。その結果、判定の一致率は97%であった。よって、その他7名分については、筆者のみの判定を用いることとした。
3. 指示詞の用法を（6）に即して分類し、分析を行った。

4.結果

4-1.全体的傾向

表2に示したように指示詞の使用数には、滞日期間の経過に伴って増加傾向が見られる。また、正用数にも増加傾向が見られる。ただし、指示詞の使用数自体が増加するので、正用率としてはあがるとはいえない。例えばARIやIBAのように1回目の調査では指示詞の使用数は、ARIが3回、IBAが9回と少ないが、4回目ではARIは87回、IBAは53回にと顕著な増加傾向を示している。しかし正用率としてはARIは100%から57.5%へと下がり、IBAは77.8%から93%へと上がっている。また、被調査者へのインタビューは毎回30分であったが、発話量には非常に個人差が多く、指示詞の使用数も個人により、大きく異なっていることが指摘できる。

4-2.正用

4-2-1.正用の用法別使用数

観察された指示詞使用数のうち、正用における用法別の使用数を表3に示した。文脈指示用法が最も多く使用されている。これにはインタビューの話題が被調査者の専門や日常生活における問題点などであり、インタビュアーに説明する性質のものであることが大いに関わっていると思われる。

4-2-2.正用の出現順序

表3に示したように、第1回目の調査では現場指示用法・絶対指示用法・文脈指示用法・ＣＳ用法が観察され、第4回目の調査ではさらに観念指示用法も観察される。また1回目にも現場指示・絶対指示・ＣＳの用法は見られるが、4回目の方が正用使用数が多くなっている。これは時間の経過とともに習得が進んだことを示している。正誤の割合、及びその用法を使用している被験者数を考慮すると、指示詞使用の正用は次のような順に出現すると考えられる。

(7) 正用の出現順序：現場指示・文脈指示＞ＣＳ＞絶対指示＞観念指示

また、文脈指示用法は常に多く観察されるが、コソアの系列別では、ソ系の頻度が高く、正用率でもソ系が最も高い。また最も低いのはコ系である。図１に示したように、ソ系は使用数も多く、また使用されたソ系には誤用が少ないということが分かる。またア系は使用数も少なく、誤用の割合が高い。よって、ソ→コ→アの順で習得が進むと考えられる。

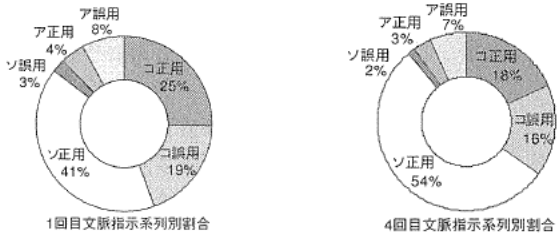


図1

正用の出現順序については、迫田（1998）と同様、文脈指示用法の正用の出現が他の用法より早いという結果が得られた。これは、文脈指示用法は日本語話者においても使用頻度が高くインプットが多いこと、また被調査者が学習したテキストでも文脈指示用法が学習項目として取り上げられていることが関わっていると思われる。ただし、迫田（1998）ではコ→ソ→アの順で正用が見られるとされているが、本研究ではソ→コ→アの順であった。インプットの量の差が習得順序に影響することを考えると、日本語話者の指示詞使用ではソ系が最も多いことから、本稿での調査結果は支持されるといえる。

また、ＣＳ用法は少数ではあるが、滞日期間の経過に伴って多く観察されるようになっている。1回目の調査では2名が各1回用いているだけであるが、4回目では3名が複数回用いるようになっている。またＣＳ用法を用いている被調査者は指示詞使用数が多く、発話量の多い学習者である。ＣＳ用法はうちとけた雰囲気で会話が進展する場合に使用されるものである。日本語での会話に慣

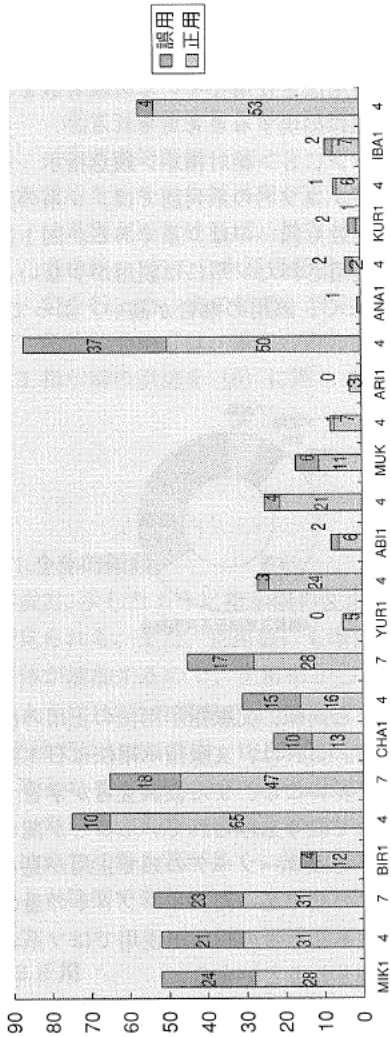


表2　指示詞使用数および正用数・誤用数

れるのにしたがって、ＣＳ用法が出現し、頻度も増えることを示唆している。

4-3.誤用

4-3-1.誤用の種類

調査期間を通じて文脈指示用法における誤用が最も多い。しかし前節で述べたように、文脈指示用法の使用数自体が顕著であるため、誤用数が多いことが、即、文脈指示用法の習得ということを意味するものではないと考えられる。表3に被調査者の発話に見られた誤用のうち、用法別の数を示した。誤用は絶対指示用法、文脈指示用法、観念指示用法に多く見られる。現場指示用法、ＣＳ用法における誤用は少ない。また全員に共通してみられる誤用は文脈指示用法における誤用のみである。ただし、文脈指示用法の誤用には次節に示す６つのパターンがあるが、被調査者全員に共通して見られる誤用パターンはない。この点に関して本研究での結果は迫田（1998）と異なる。

本研究で観察された誤用の種類を以下に示す。

1. 文脈指示エラー　文脈指示用法における系列のエラー。例えば本来ソ系を用いるところでコ系を用いるような場合を指す。他の誤用パターンについては次節で示す。

（例）NS：　それより　研究の方はどうですか。[注5]
MIK：もうすぐセミナー、ありますから　わたしは　しなくてはいけないので　今　このため（→そのため）準備してます。

2. 例示エラー　例示をする場合にコソアを使用するエラー。本来は指示詞を用いないところで、指示詞を使用するもの。

（例）ABI：こまった　ことですか？
NS：　うん　うん
ABI：研究室で？
NS：　そう　うん
ABI：えーっと例えば　あん　あの　この機械は　一人だけ　あの使い方、使い方は　一人だけ　わかります。その人は　全然英語で話しません。（→研究室に機械があり、その機械の使い方の分かる人は一人しかおらず、しかもその人は英語を話さないので、説明してもらうのに困る、の意）

例示エラーは話し手のみの頭の中にある対象をコソアで指示するものである。観念指示用法の正用例にも例を示す場合にコソアを使用するものがある。

[注5] NSとは日本語話者インタビュアーを表すものとする。以下同様の扱いとする。

学習者名	調査回	現場指示		絶対指示		文脈指示		観念指示		ＣＳ用法		その他		計		
		正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	正	誤	計
MIK	1回目	0	0	1	0	**26**	**19**	0	4	**1**	0	0	1	28	24	52
	4回目	0	0	0	0	**30**	**17**	0	4	**1**	0	0	0	31	21	52
BIR	1回目	0	0	0	0	**12**	**2**	0	0	0	0	0	2	12	4	16
	4回目	0	0	4	2	**59**	**4**	0	4	**2**	0	0	0	65	10	75
CHA	1回目	0	1	2	2	**11**	**6**	0	0	0	0	0	1	13	10	23
	4回目	0	0	1	0	**11**	**14**	0	1	**4**	0	0	0	16	15	31
YUR	1回目	0	0	0	0	**5**	**0**	0	0	0	0	0	0	5	0	5
	4回目	6	0	0	0	**18**	**3**	0	0	0	0	0	0	24	3	27
ABI	1回目	0	0	0	0	**6**	**1**	0	1	0	0	0	0	6	2	8
	4回目	0	0	4	1	**16**	**1**	1	2	0	0	0	0	21	4	25
MUK	1回目	1	0	0	0	**10**	**3**	0	0	0	1	0	3	11	6	17
	4回目	2	0	0	0	**5**	**1**	0	0	0	0	0	0	7	1	8
ARI	1回目	0	0	0	0	**3**	**0**	0	0	**1**	0	0	0	3	0	3
	4回目	2	0	2	0	**32**	**33**	13	4	0	0	0	0	50	37	87
ANA	1回目	0	0	0	0	**0**	**1**	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	4回目	0	0	0	0	**2**	**1**	0	1	0	0	0	0	2	2	4
KUR	1回目	0	0	0	0	**1**	**2**	0	0	0	0	0	0	1	2	3
	4回目	0	0	0	0	**6**	**1**	0	0	0	0	0	0	6	1	7
IBA	1回目	0	0	0	0	**7**	**0**	0	0	0	0	0	0	7	2	9
	4回目	1	0	0	0	**50**	**2**	0	2	0	0	0	0	53	4	57
計	1回目	1	1	3	2	**81**	**34**	0	5	**2**	1	0	7	87	50	137
	4回目	11	0	11	3	**229**	**75**	14	18	**7**	0	0	0	272	96	368

表3　用法別使用数および正用数・誤用数　　（回）

（例）MIK：（分からない漢字を）調べるのことも　時間かかります。難しい。

NS：　そうだね。ん　なるほどね。

MIK：誰か　聞きます。たぶん「これは何ですか」、ね。

発話を引用して例を示すものである。このような例は1回目には見られなかったが、4回目には20例見られた。例示エラーも1回目では4例であったが、4回目には11例に増加している。このことから、例示エラーは観念指示用法の過剰使用による誤用であると考えられる。

3. ソ系の非用　　ソ系文脈指示用法を用いるべきところで用いられないもの

（例）（昨日何をしたかという質問に対して）

IBA：それから　あの　えー　本を読みました。Draw of the rings本の名前です。（→その本の名前です）

4.コ系絶対指示エラー　　ある場所を表すのにコ系指示詞を伴う誤用。

（例）（被調査者が名古屋の中ではお寺を見に行ったという話をしている。）

CHA：大須観音。

NS：　ああ　ははは。

CHA：とか　この　本山の・・・（→「本山の」）

NS：　本山のなんだっけ？ももわらじ　じゃなくて

CHA：ああ、ももわらじ。

これは「ここ」のように絶対指示用法として指示詞のみで用いる、あるいは「本山の」のように地名のみで用いるところを「コ系指示詞＋場所名詞」としてしまう誤用である。絶対指示用法の過剰使用と考えられる。

日本語学習者の発話には以上に示した4種類の誤用が観察された。なお、表3の「その他」の誤用は例示エラー、ソ系の非用エラー、コ系絶対指示エラーを指す。また、表4には1回目、4回目、7回目に観察された誤用１～4の数および誤用数における各割合を示した。

調査回	文脈指示エラー	例示エラー	ソ系の非用	絶対指示エラー	計
1回目	35（70%）	4（8%）	9（18%）	2（4%）	50
4回目	62（82.%）	11（14.7%）	0	2（2.6%）	75
7回目	47（87%）	4（7.4%）	0	3（5.6%）	54

表4　誤用パターン　使用数

4-3-2.文脈指示エラー

4-3-2-1.誤用パターンの推移

文脈指示エラーには（8）に示す誤用パターンがある[注5]。表5は文脈指示エラーの誤用パターンとその使用数である。本来使用されるべき系列を一番上に、誤って使用されている系列をその下に示した。

（8）ａコ→ソ（2例）コ系を使用すべきところでソ系を使用する誤用

（例）NS：　スリランカの方が名古屋よりはいい？

CHA：いい。長い時間でそういうふうに（→こういうふうに）暑くない。

ｂソ→コ（85例）、ｃソ→ア（52例）、ｄア→コ（2例）、ｅア→ソ（3例）

（8）の5パターンのうちa（コ→ソ）、d（ア→コ）は各2例、e（ア→ソ）は3例と少なく、顕著な誤用とは言えない。一方、b（ソ→コ）とc（ソ→ア）の誤用が多く顕著な誤用であるといえる。b（ソ→コ）の誤用は1回目、4回目、7回目を通して、常に数が多く、減少する傾向も見られない。c（ソ→ア）の誤用は1回目は少ないが、4回目、7回目と増加する傾向が見られた。

誤用の出現順、消滅順を迫田（1998）の結果と比較してみよう。迫田（1998）では文脈指示用法での誤用の出現順は「コ系＞ア系＞ソ系」であるとされている。本研究でも同様の結果が得られた。また誤用の消滅に関して、韓国語話者では「コ系＞ソ系＞ア系」、中国語話者では「ソ系＞ア系＞コ系」とされている。本研究の被調査者の母語は10名ともいずれでもない。「ソ→ア」では迫田（1998）の結果を支持する傾向が見られた。迫田（1998）では「ソ→ア」は学習を始めて一年ほど経過した時点で出現し、3年が経過しても母語を問わず消滅しない、つまり習得が困難であるという結果が出ている。本研究でも、「ソ→ア」は1回目では9例と少なく、4回目で22例、7回目でも21例見られる。つまり学習開始後6ヶ月～1年では出現が少なく、１年半～２年経過して出現し、2年半～3年経過しても消滅していない。一方、誤用「ソ→コ」については迫田（1998）と異なる結果となった。中国語話者では3年経過しても誤用が消滅せず、韓国語話者では1年7～8ヶ月で消滅するとされているが、本研究では4回目、つまり、学習開始後１年半～２年経過した時点でも多数見られ、習得が進んだとはいえない。被調査者の母語がさまざまであることを考慮すると、コ系の習得は迫田（1998）の結果よりも時間がかかるものであると考えられる。

以上のように、「ソ→ア」の習得過程については迫田（1998）を支持する結

[注5] 組み合わせとしては「コ→ア」の誤用も考えられるが、本研究では一例も見られなかった。

	本来コ系を使用すべき場合						本来ソ系を使用すべき場合						本来ア系を使用すべき場合					
誤用	ソ系			ア系			コ系			ア系			コ系			ソ系		
回	1	4	7	1	4	7	1	4	7	1	4	7	1	4	7	1	4	7
MIK	0	0	0	0	0	0	**12**	**17**	**22**	**6**	0	0	**2**	0	0	0	0	0
BIR	0	0	0	0	0	0	**2**	**1**	0	0	**2**	**7**	0	0	0	0	**1**	**1**
CHA	0	0	2	0	0	0	**6**	0	**2**	0	**13**	**14**	0	0	0	0	0	0
YUR	0	0		0	0		0	**3**		0	0		0	0		0	0	
ABI	0	0		0	0		0	0		**1**	**1**		0	0		0	0	
MUK	0	0		0	0		**1**	**1**		**2**	0		0	0		0	0	
ARI	0	0		0	0		0	**16**		0	**4**		0	0		0	0	
ANA	0	1		0	0		**1**	0		0	0		0	0		0	0	
KUR	0	0		0	0		**1**	0		0	**1**		0	0		**1**	0	
IBA	0	0		0	0		0	0		0	**1**		0	0		0	0	
計	0	**1**	**2**	0	0	0	**23**	**38**	**24**	**9**	**22**	**21**	**2**	0		**1**	0	

表5　文脈指示エラー系列別選択数

果であったが、「ソ→コ」について反する結果となった。

4-3-2-2.「パターン形成」について

迫田（1998）は誤用パターンｅ（ソ→ア）の原因として、学習者が誤った規則を用いていることを指摘した。ソ系、ア系の指示詞と名詞の結びつきに関して、日本語話者は自由な組み合わせを行っているのに対し、学習者は抽象名詞にはソ系の指示詞、具体名詞にはア系の指示詞を用いるというパターン形成を行っていることを指摘している。これは、学習者が指示詞の運用にあたって母語に関わらず、独特の規則を形成していることを示しており、中間言語の性質を考える上で興味深い指摘である。本研究での被調査者にも誤用パターンｅにそのようなパターン形成が見られるかどうかを検証した。

迫田（1998）はパターン形成の例として（9）のような名詞を示している。

（9）抽象名詞語彙：～こと、～の、～場合、～話、～意味、～気分、～理由
～考え、～感じ、～レベル
具体名詞語彙：～人、～先生、～会社、～学校、～先輩、～大学、～子
～おじさん、～おばさん、～店

迫田（1998）と異なり、本研究で被調査者の発話に見られた「ソ系＋名詞」「ア系＋名詞」には名詞の性質と特定の系列の結びつきという関係は見られなかった。被調査者の発話に見られた指示詞と名詞の結びつきを次に示す。

（10）ソ系のみと組み合わされた名詞（その、そういう＋）
抽象名詞語彙：～こと、～ふう、～場面、～単語
具体名詞語彙：～たまご、～岩、～熱、～授業、～レストラン、
～論文、～コンピュータ、

（11）ア系のみと組み合わされた名詞（あの＋）
抽象名詞語彙：～意味、～仕事
具体名詞語彙：～アパート、～先生、

（12）ソ系、ア系いずれとも組み合わせが見られた名詞
抽象名詞語彙：～時、～ことば
具体名詞語彙：～人、～友達、～学生

（10）～（12）に示したように名詞の具体性と特定の系列の結びつきに相関は見られなかった。「それ」「あれ」という形態に関しても、「それ」を用いるべきところに「あれ」を用いる誤用が、「あれ」を用いて具体的な事柄を指示しているという傾向は見られない。よって、ここでは日本語学習者がパターン形成を行っているとはいえず、他の原因を考える必要がある。

4-3-2-3.誤用の原因について

文脈指示エラーにおける顕著な2つのエラーの誤用の原因についてパターン形成以外の原因の可能性を考察する。「ソ→ア」の誤用例を見ると、聞き手と共有知識のない指示対象に対してア系を使用し、誤用となっている。

(13) CHA：研究は時々　何かセミナーとか。あれは（→それは）前の一つのセミナー、日本語でやったんですけど、それだけね。

(13) では「セミナー」について説明をしている。セミナーは学習者CHAが初めて導入した語であるが、それをア系で指示している。文脈指示ではア系は話し手と聞き手が共有の知識・体験のあるものを指示する場合に用いられる。銅直（1998）は「共有の知識・体験」について、聞き手と話し手の指示対象に対する情報量が同レベルのものであると判断されて初めてア系が使用可能になることを指摘している。つまり、話し手あるいは聞き手が一度導入した対象について話を進める場合、一度導入されれば、次の発話から「共有の知識・体験がある」ものとみなされ、ア系が使用可能となるわけではない。しかし（13）のように、誤用には日本語話者、あるいは被調査者自身が導入した指示対象を、導入直後からすぐア系で指示するものが多い。よって、学習者は聞き手の情報量が話し手のものと同レベルのものと判断するという点に関して、間違ったルールを形成している可能性がある。

次に「ソ→コ」の誤用例を見てみよう。

(14)（日本語のクラスについて説明している）

ARI：volⅢを勉強しました。

NS：　それは、週2回か3回ですよね。

ARI：ええ、これは（→それは）毎日、毎日だった。このコース（→そのコースは）1ヶ月の間は　毎日。

(15)（東京に友達に会いに行ったことについて）

NS：　東京に友達がいらっしゃる？

BIR：あー　はい。日本の友達。

NS：　日本の友達、そうですか。

BIR：今　んー　この友達は（→その友達は）antarcticaに行きました。

(14)（15）はいずれも、指示対象に関する情報量は、話し手の方が多い。その点ではコ系を選択することも可能であるといえる。コ系を使用すると指示対象に対し、話し手が心理的な近さを抱いていることが示されるが、ここでは聞き手に指示対象について説明をする場面であり、心理的な近さを示すことよりも、聞き手の情報量に対する配慮が優先される。誤用はこのように聞き手への配慮が必要で、指示対象に対して話し手が中立的な関わりを示すべきところで見ら

れる。よって「ソ→コ」の誤用においても聞き手の情報量への配慮に関して誤ったルールを形成している可能性がある。

以上、「ソ→ア」「ソ→コ」の誤用の原因に、コソアの各系列の特徴と、聞き手の情報量への配慮との関わりを十分に習得していないという可能性を指摘した。

4-4.コソア選択の傾向

指示詞は複数の系列が可能な場合、つまりコ系、ソ系がどちらも可能である場合とソ系、ア系がどちらも可能である場合がある。このような場合の日本語学習者のコソア系列の選択の傾向を分析した。表6に示す。

系列		1回	4回	7回		系列		1回	4回	7回	
コソ	コ	15	30	9	54	アソ	ア	0	2	3	3
	ソ	2	4	0	6		ソ	1	1	0	0

表6　コ・ソ／ア・ソ選択傾向

表6からコ・ソ両系列が可能な場合、学習者はコ系を選択する傾向がありア・ソ両系列が可能な場合、ア系を選択する傾向があることが分かる。(16) にコ・ソが可能な場合、(17) にア・ソが可能な場合の例を挙げる。

(16)　NS：　あのMIKさんの専門は森だか、自然ですよね。自然。
　　MIK：自然。でも、<u>これ</u>（これ／それ）はメイントピック　ないです。

(17)　IBA：指導教官と多分、全部英語で話しています。うん。
　　NS：　そうですか。時々　日本語？
　　IBA：時々　日本語、あ、私は時々　日本語で質問　あります。
　　NS：　はあ
　　IBA：けど　<u>あの</u>先生は（あの／その）いつも英語で答えます。

コ・ソが可能な場合にソ系を用いず、コ系を選択し、ア・ソが可能な場合に、やはりソ系を用いず、ア系を選択するという傾向が、コソア各系列の特徴を十分習得した上での傾向であるかどうかは疑わしい。4-3-2.で文脈指示用法の顕著な誤用パターンが「ソ→コ」「ソ→ア」であることを見た。いずれもソ系を用いるべきところで、コ系やア系を用いて誤用となってしまうものであった。コソア選択の傾向はこの誤用に通じるものがあるように思われるが、詳しい分析は今後の課題である。

5.おわりに

インタビュー資料における日本語学習者の指示詞の使用実態の分析を通じて、学習者の指示詞使用の特徴として以下の4点が明らかになった。

1. 滞日期間の経過に伴い、指示詞の正用使用数、用法数は増加する。
2. 日本語学習者の指示詞使用における誤用には文脈指示エラー、例示エラー、ソ系の非用、コ系絶対指示エラーの4種類が見られる。このうち、文脈指示エラーは先行研究でも指摘されているが、他の誤用は指摘されていない。また、ソ系の非用には時間の経過に伴い減少する傾向が見られたが、他の３つの誤用には減少傾向は見られなかった。
3. 文脈指示エラーの顕著なパターンとして「ソ→コ」「ソ→ア」が見られる。「ソ→ア」の習得過程は先行研究と一致する傾向を示したが、「ソ→コ」は先行研究の結果よりも習得に時間がかかる傾向を示した。また「ソ→ア」の原因として先行研究で指摘される「パターン形成」は見られなかった。本稿では「ソ→ア」「ソ→コ」両誤用の原因に各系列の特徴の未習得、情報量の管理による聞き手への配慮の未習得の可能性を指摘した。
4. 日本語学習者にはコ・ソ両系列が可能な場合にコ系を、ア・ソ両系列が可能な場合にア系を選択する傾向が見られる。

日本語学習者の指示詞の習得過程について、以上4点の特徴を指摘した。正用および誤用の出現順、誤用の種類に関しては必ずしも先行研究と一致する結果とはならなかった。また、今まで分析されていない系列の選択傾向についても本稿では分析を試みた。

今後の課題として、誤用の原因として可能性を指摘した点について検証すること、さらに時間が経過した場合の習得過程の変化について分析することに加え、次の点を挙げておく。本稿では指示詞コソアの形態に関しては分析を行っていない。資料を分析する過程において、「コレ」「コノ」「ココ」[注6]の3形態は使用頻度が高く、ほぼ全員にみられたが、「コンナ」「コウイウ」等の形態はほとんど使用されず、使用された場合も誤用である傾向がみられた。形態の習得過程については先行研究でもあまり分析されていない。習得過程を詳しく分析し、指示対象と正用、誤用の相関を明らかにすることによって、指示詞の中間

[注6] ここでは「コレ」は「これ」「それ」「あれ」の3形態をまとめて表すものとする。「コノ」「ココ」等についても同様の扱いとする。

言語の性質はさらに明確になるものと思われる。

引用文献

上垣康与1997「日本語学習者の指示詞使用－文脈指示のコ・ソ・アの選択－」『九州大学留学生センター紀要』第8号pp.27-40九州大学留学生センター

迫田久美子1998『中間言語研究－日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得－』渓水社

銅直信子1998「談話参加者の情報量と指示詞」『日本語教育』96号pp.97-108 日本語教育学会

堀口和吉1990 「指示詞コ・ソ・アの表現」『日本語学』9巻3月pp.59-70明治書院